慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランス語版『資本論』第一巻第三章第一節「価値の尺度」の研究：ドイツ語本文との比較対照
Sub Title	The study of the French version of Das Kapital, vol. 1, chap. 3, sect. 1 : the measure of values, as compared with the German original
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.1/2 (1975. 2) ,p.87- 93
JaLC DOI	10.14991/001.19750201-0087
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750201-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

フランス語版『資本論』第一巻第三章 第一節「価値の尺度」の研究

——ドイツ語本文との比較対照——

遊　部　久　蔵

本稿はさきに発表した「フランス語版『資本論』第一巻第一章『商品』の研究」（本誌64巻2・3合併号，昭和46年2月。拙著『商品論の構造』青木書店，昭和48年所収）および「フランス語版『資本論』第一巻第二章『交換過程』の研究」（本誌66巻12号，昭和48年12月）の続稿である。ここで対象とされるテキストは前回の研究でのそれと全く同じであるが，再び一覧表として以下に示しておく。

1. ロワ訳とよばれ，ここで対照とされているフランス語版。Le Capital par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement revisée par l'auteur, 〔Livre premier〕 Paris, Editeurs Lachâtre, 1872—1875.（記号Fでこれを示す）。

2. 現行版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, in: K. Marx/F. Engels Werke, Bd. 23, Berlin, Dietz Verlag, 1962. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻，大月書店，昭和40年（記号Dでこれを示す）。

3. 初版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, Hamburg, Verlag von Otto Meissner, 1867.

4. 第2版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, zweite verbesserte Auflage, Hamburg, Verlag von Otto Meissner, 1872—1873.

5. カウツキー版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, Volksausgabe, herausgegeben von Karl Kautsky, Stuttgart, J. H. W. Dietz, 1914.

6. 英訳。K. Marx: Capital, Vol. 1, translated by Samuel Moore and Edward Aveling and edited by Frederick Engels, Moscow, Foreign Languages Publishing House, 1961.

7. Gallimard 版。K. Marx: Le Capital, livre premier. Traduction par Joseph Roy, revuo par Maximilien Rubel, en: Karl Marx Œuvres, Économie, tome 1 (Bibliothèque de la Pléiade), Paris, Éditions Gallimard, 1965.

8. Éditions Sociales 版。K. Marx: Le Capital, livre premier. Traduction de Joseph Roy, entièrement revisée par l'auteur. tome 1, Paris, Éditions Sociales, 1969.

9. 『経済学批判』。K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (1859), in: K. Marx/F. Engels Werke, Bd. 13, 1961. 杉本俊朗訳，国民文庫，大月書店，昭和41年。

なお引用文中の原文でイタリック，ゲシュペルトの部分には傍点を付した。引用文中の〔　〕内の文章は，私の文章である。

対照のさいの記号の意味を後出の項目11のそれについて例示する。

D. S. 115. ③. Z. 1—3. 訳. P. 133.——上記の文献リスト中の2の S. 115. 第3パラグラーフ。1行目—3行目。同訳. P. 133.

F. P. 42. I. ③. L. 1—4.——上記の文献リスト中の1の P. 42. 左欄〔右欄は II で示す。〕第3パラグラーフ。1行目—4行目。

（なお，ひきつづき第3章第2節以下の研究成果が逐次本誌上に公表される予定である。）

1. D. S. 109. Fußnote 50. Z. 4—5. 訳. P. 126.
「なぜなら商品という表示は，商品と貨幣商品とへの商品の二重化を含んでいるからである。」
F. P. 39. note 1 に欠如。

（付注） Gallimard 版（p. 631）にも Éditions Sociales 版（p. 104）にも欠如。

2. D. S. 110. ①. Z. 6—16. 訳. P. 126.

「それゆえ，諸商品の一般的な相対的価値形態は，いまでは再びその最初の単純な，または個別的な相対的価値形態の姿をもっているのである。〔ここまで初版（S. 56）にない。〕他方，展開された相対的価値表現，または相対的価値表現の無限の系列は，貨幣商品の独自な相対的価値形態になる。〔傍点部分初版ゲシュペルト，以下同じ。〕しかし，この系列は，いまではすでに諸商品価格のうちに社会的に〔「社会的に」＝初版になし〕与えられている。物価表の相場〔die Quotationen eines Preiskurants. カウツキー版（S. 57）では die Notierungen einer Preisliste〕を逆に読んでゆくとよい。〔カウツキー版では „. . . rückwärts" のつぎにコンマ。以下においてカウツキー版と現行版との間にコンマの異同があるが，とくにしるさぬ。その他の諸版の間のコンマの異同についても同じ。〕すると貨幣の価値の大きさがすべてのありとあらゆる諸商品で表わされているのが見いだされる。〔初版に以下がはいる。「この系列はまたあたらしい意味を受取っている。金は貨幣なので，すでにその自然的形態において，その相対的価値諸表現とは独立に一般的等価形態あるいは一般的な直接的な交換可能性の形態をもっている。したがって，その系列はいまでは金の価値量を表わすと同時に金が直接的に取り換えられうる質料的富または諸使用価値の展開された世界を表わしている。」（荒木廸夫氏著『「経済学批判」と「資本論」』新評論，昭和49年，p. 198 参照）〕これに反して，貨幣は価格をもっていない。このような，他の諸商品の統一的な相対的価値形態に参加するためには，貨幣はそれ自身の等価物としての自分自身に関係させられなければならないであろう。」

F. P. 40. I. ①. ②.

「それゆえ諸商品の相対的価値の一般的形態は，いまではその原始的な姿（son aspect primitif），その単純な形態を取り戻した。

貨幣商品は，その方では，価格を全然もたない。それがすべての他の諸商品に共通である，この相対的価値の形態に参加しうるためには，等価を自分自身に役立てえなければならない。これに反して一商品の価値が一系列の無限の方程式で表現される形態IIは，貨幣にとってその相対的価値の排他的形態となる。しかしこの系列は，いまでは諸商品価格のうちにすでに与えられている。貨幣価値の大きさをすべてのありとあらゆる諸商品のうちに見出すためには，物価表の相場を逆に読めば十分である。」

（付注） ロワ訳文中，最初のパラグラーフ2行目の「その原始的な姿」における「原始的」《primitif》の含意については，前出拙著『商品論の構造』pp. 270—271，林直道氏「フランス語版『資本論』の科学的意義」『経済』昭和48年1月，pp. 120—121 参照。なおドイツ語本文の方にも《primitif》に該当する „ursprünglich" の語がある。

3. D. S. 112. Fußnote 53（第2版への注）.

〔i〕 ①. Z. 13. 訳. P. 129.「34, 704, 000 ポンド・スターリング」

F. P. 40. II. note 1. ②. L. 8.「14, 740, 000 ポンド・スターリング」

〔ii〕 同じくこの Fußnote 53. Z. 13—14. 訳. P. 129.「両金属が法定の価値尺度であり，……支払いうる諸国」に，フランス語訳では「フランスのように」の形容句が附されている。

〔付注〕〔i〕，〔ii〕についてロワ訳をテキストとする Gallimard 版（p. 634）も Éditions Sociales 版（p. 106）もともにロワ原本と同じである。〔i〕の「34, 704, 000 ポンド・スターリング」には，現行版編注で「第2版から第4版まで，14, 704, 000」としるされている。カウツキー版（S. 58）および英訳（p. 97）はこの 14, 704, 000 の数字を採用している。ちなみに引用文献『経済学批判』（S. 59. 訳. P. 92）では 34, 704, 000 とある。（しかし『経済学批判』Gallimard 版の訳文〔p. 330〕でも Éditions Sociales 版の訳文〔p. 49〕でもロワ原本と同じである。）

4. D. S. 112. ①. Z. 4—9. 訳. P. 129.

「それゆえ諸商品価値は，いろいろな大きさの表象された金量に転化されているのであり，つまり，商品体が種々雑多であるにもかかわらず，同名の量，金量に転化されているのである。このようないろいろな金量として，諸商品価値は互いに比較し合い，測り合うのであって，技術上，諸商品価値を，それらの尺度単位としてのある固定された金量に関係させる必要が発生する。〔「このような…」以後が初版（S. 58）ではつぎの如くである。「さまざまの金量は，それらが同名の量であるから，それらがその尺度単位としての一定の金量に関係させられることによって相互間で比較し合い測り合うのである。」（荒木氏前掲書，pp. 163—164 参照。）〕」

F. P. 40. II. ②. L. 7——P. 41. I. ①. L. 4.

「同一名称の諸量として，あるいは同一物，金のさ

まざまの諸量として，それら〔諸商品〕はそれらの間で比較され測られ，こうして尺度単位として固定され決定されたある金量〔ロワ訳，Éditions Sociales 版 (p. 107) ともにイタリックで「量」を強調，Gallimard 版 (p. 634) にこの強調なし。〕にそれらを引合わせる技術的必要が発展する。」

5. D. S. 113. Fußnote 55. 訳. 130.

「第2版への注。イギリスの諸著述では，価値の尺度 (measure of value) と価格の尺度基準 (standard of value) とについての混乱が言語に絶する。諸機能が，したがってまたそれらの名称も，絶えず混同される。」

F. P. 41. この note がない。

(付注) Gallimard 版，p. 635 編注1 (p. 1641) でこれが補足されている。Éditions Sociales 版 (p. 108) にも編注としてことわってこの注が付されている。じつはこの一文は F. P. 42. II. note 4 の最終部分へ書き直して編入されている。後出の項目12をみよ。この点，Gallimard 版 (p. 639)，Éditions Sociales 版 (p. 110) もロワ訳のまま。

6. D. S. 114. ①. Z. 1—2. 訳. P. 131.

「といっても，いまでは商品はみな以前よりも高いかまたは低い金価格で表わされるのではあるが。」〔初版 (S. 59) ではこの文節をふくむパラグラーフは，現行版の S. 113 の第1パラグラーフ (訳. P. 130 の第2パラグラーフ) に内容上該当するパラグラーフの次のパラグラーフとしてつづいている。〕

F. P. 41. II. ①. この一文節は欠如しており，現行版にないつぎの脚注1が付されている。

脚注 1。「貨幣はたえずその価値を変えるが，それにもかかわらずそれが全く不変のままであるのと同様に価値の尺度として役立ちうる。」(Bailey: Money and its vicissitudes, London, 1837, p. 11.) この点，Gallimard 版 (p. 636) も，Éditions Sociales 版 (p. 108) もロワ訳と同じである。

(付注) この脚注はもともと『経済学批判』S. 55 (訳. pp. 86—87) および『経済学批判要綱』(K. Marx: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, 1953. S. 693—694. 高木幸二郎訳. pp. 768—769) 中に引用されている文章の冒頭の部分である。カウツキー版 (S. 60) には，この脚注が注 55a として付されている。

7. D. S. 114. Fußnote 56. 訳. P. 132.

「ところで，これはまた一般的な歴史的妥当性をもつものでもない。」

F. P. 41. この脚注は欠けている。

(付注) この脚注は初版 (S. 58) でも脚注 46a としてある。カウツキー版 (S. 61) にもある。Gallimard 版 (p. 637. 編注1〔p. 1641〕) および Éditions Sociales 版 (p. 109. 編注) では，補足されている。

8. D. S. 114—5. Fußnote 57. 訳. P. 132.

「第2版への注。こうして，イギリスのポンドはその元来の重量の$\frac{1}{3}$よりもわずかを，連合以前のスコットランドのポンドはたった$\frac{1}{36}$を，フランスのリーヴルは$\frac{1}{74}$を，スペインのマラベーディは$\frac{1}{1000}$よりもわずかを，ポルトガルのレイ〔Rei. 第2版 (S. 78) Ree〕はもっとずっと小さな割合を表わしている。」

F. P. 41. II.—P. 42. I. note 2.

現行版脚注 57，58 はロワ訳では入れ替っている。したがって，ここでの注2は現行版脚注58に該当する。

「『今日では観念的である貨幣は，すべての国民の最も古い貨幣であり，すべてある時期に実在的であった。(この最後の主張はそんなに大きな程度においては正当でない。〔マルクスの挿入句。このマルクスの挿入句は『経済学批判』におけるガリアーニの同文の引用にさいしても同じく挿入されている。S. 56. 訳. P. 88.〕)。それらは実在的であったから，それらは計算貨幣 (monnaie de compte) として役立った。』(Galiani, 1. c. p. 153)」〔『経済学批判要綱』中では，このガリアーニの文章は，イタリア語で引用されている。S. 730. 訳. P. 813.〕

(付注) この現行版脚注 57 は，アドラツキー版 (S. 105) ではロワ訳のように入れ替えられており，ディーツ版 (S. 105) では現行版と同じである (S. 105)。荒木氏は「なおこの注〔注 57〕は (ディーツ版)〔S.105——荒木氏〕では注 58 と入れ替わっている。」(前掲書，p. 194. 注9。なお同ページ注3も参照。) といわれるが，1953年版ではたしかにそうであるが，私の手許にある1960版では，現行版のように改められている。

カウツキー版 (S. 61) でもロワ訳と同じくこの部分の注の入れ替えがあって，しかもその文章は現行版よりもロワ訳にちかい個所をふくむ。すなわち次のとおりである。「第2版への注。『その名称がもはや観念的でしかない貨幣種類は，すべての国民において最も古い貨幣である。それらの貨幣のいずれもかつては実在的性質のものであった。(この最後の記述はあてはまらない場合がかなり屢々ある。——マルクス) そしてそれらが実在的性質のものであったからこそ，それらは計算貨幣 (Rechengeld) として役立った。』(Galiani, „Della Moneta", p. 153.)」カウツキーはこの脚注についてつぎのように付記している。曰く。「以前のドイツ語諸版

の『資本論』では，注57と注58とが入れ替えられている。」カウツキー版の訳者である河上肇博士はカウツキーのこの文章を訳してから，つづけて曰く。「それはマルクス自身が第2版で誤って記入したものを，そのまま踏襲したためである。今カウツキー版によって之をかくの如く改める。」（第1巻，上冊，改造社，昭和6年，p. 206.）しかし「マルクス自身が第2版で誤って記入した」とは，いかなる根拠によるものであろうか。アドラツキー版＝ディーツ版（1953年版？）をテキストとする長谷部文雄氏の訳本では，注57の末尾につぎのようにいう。「従来の版では，この注が，つぎの注58と入りちがいになっている。フランス語版におけるマルクス自身の入れかえにしたがう。」（『世界の大思想』第18巻，河出書房新社，昭和39年，p. 88.）

長谷部氏はある小論でつぎのようにしるされている。「校訂の逆もどりの例をもう一つ。——第1部原典105頁にある注57と58とは，マイスナー版原典では各版を通じて内容が入り違っていたのを，カウツキー版で初めて『従来のドイツ語版では入り違いになっている』という注をつけて入れ替えたものである。この入れ替えは本文との関係から見て正しいのであるが，それも，カウツキーの独断ではなく，マルクス自身が，フランス語版の校訂のさいに入れ替えたのである。インスティテュート版が黙って（何らの注もつけず）この入れ替えを採用したせいであろうか。最近のロシア語全集版では，またもとの通りに入れ替えられているらしい。〔長谷部氏の参照した版本は，ロシア語全集第2版（1960）と思われるが，そこでは同氏のしるすとおりである（стр. 109—110）〕。というのは，国民文庫版では旧版（マイスナー版）に逆もどりさせて『アドラツキー版以来の明白な入れ違いである』という注がついているからである。〔くわしく引用すると，『国民文庫』第1分冊，p. 176 訳注に曰く。「ディーツ版では，この注〔注57のこと〕が（58）に，次の注（58）が（57）になっているが，アドラツキー版以来の明白な入れ違いである。」しかしこの訳注は，この付注のはじめに荒木氏の見解に関連してしるしたようにその後のディーツ版ではこの点，現行版と同じであるから訂正を要する。〕それでは，マルクスがフランス語版で行なった入れ替えを否定することになろう。」（「『資本論』の校訂について」『経済評論』昭和37年7月号，p. 105）ちなみに長谷部氏の訳本では，その他の青木文庫版（第1分冊，p. 213）でも角川文庫版（第1分冊，p. 157）でも，脚注57，58の順序は，ロワ訳のそれに準じている。河上博士も長谷部氏も理論的理由で，つまり本文と脚注との対応関係を考えた上でロワ訳の方が正しいとみなしているようであるが，この点についてはつぎの項目（9）の付注でもう一度述べることとする。

なお，この点，Éditions Sociales 版（p. 109）および Gallimard 版（p. 637）では編注なしにロワ訳と同じ順序となっている。

9. D. S. 115. Fußnote 58. 訳. P. 132.

「第2版への注。『その名称が今日ではもはや観念的でしかないような鋳貨は，すべての国民において最も古いものである。それらの鋳貨はみなかつては実在的であったのであって，それらが実在的であったからこそ，それらで計算がなされたのである。』〔第2版＝英訳，イタリア語。カウツキー版，訳文ことなる。〕（Galiani, „Della Moneta", l. c. p. 153）」

F. P. 42. I. note 1.

「こうして，イギリスのポンドはその元来の重量のほとんど$\frac{1}{4}$〔現行版では$\frac{1}{3}$〕，1701年〔現行版注解38では1707年とある。S. 849. 訳. 注解. p. 10〕の連合以前のスコットランドのポンドはたった$\frac{1}{36}$，フランスのリーヴルは$\frac{1}{94}$〔現行版では$\frac{1}{74}$。Gallimard 版（p. 637），Éditions Sociales 版（p. 109）でも同じく$\frac{1}{74}$とある。この脚注について Éditions Sociales 版の編注に曰く。「この注の数字は MEL 研究所版に拠って訂正された。」英訳（p. 99）でも$\frac{1}{74}$〕，スペインのマラベーディは$\frac{1}{100}$〔現行版，Gallimard 版，Éditions Sociales 版，英訳ともに$\frac{1}{1000}$〕より以下，ポルトガルのレイはもっとずっと小さな分数のみを示している。デイヴィッド・アーカート氏は，その『常用語』中で貨幣尺度単位としてのイギリスのポンド（ポンド・スターリング）がもはや〔Éditions Sociales 版，「もはや」なし〕1オンスの金の$\frac{1}{4}$にしか値しないというかれを恐怖させるこの事実に関してつぎのように述べている。『これは尺度を偽造することであって，尺度基準を確定することではない。』と。この貨幣基準の偽称のうちにどこでもと同じく，かれは文明の偽造する手を見出すのである。」

（付注）脚注57，58は前述のようにロワ訳で入れ替えになっているだけでなく，さらに対応する双方の脚注の文章の間にも若干の相違のあることが注意されるべきである。とくにロワ訳注58の後半，「アーカート氏云々」以後は，現行版脚注59にそのまま該当する。項目10参照。

ここであらためて問題となるのは，脚注57，58の入れ替えの当否である。これについては脚注と本文と

の対応関係が判断の一つの基準となるであろう。元来これらの脚注が関係する本文においては，金属重量の貨幣名（たとえば銀1封度＝1磅）が，しだいにそれらの最初の重量名から離れてくることの歴史的原因として三つのものがあげられているのである。現行版の脚注57，「こうして，イギリスのポンドは……」が付せられた本文は上記の原因中の第2であって，つぎのとおりである。「(2)富の発展につれて，あまり高級でない金属はより高級な金属によって価値尺度機能から駆逐される。銅は銀によって，銀は金によって。たとえこの順序がすべての詩的年代記と矛盾していようとも。〔ここに脚注56がはいる。脚注56に曰く。「ところで，これ《「すべての詩的年代記」――引用者》はまた一般的な歴史的妥当性をもつものでもない。」〕たとえば，磅（ポンド）は，現実の1封度（ポンド）の銀を表わす貨幣名だった。金が価値尺度としての銀を駆逐するやいなや，同じ名称が，金と銀との価値比率にしたがって，おそらくは$\frac{1}{15}$封度（ポンド）等々の金に付着する。貨幣名としての磅（ポンド）と，金の普通の重量名としての封度（ポンド）とは，いまでは分離されている。」(S. 114. 訳. P. 132.)

また現行版脚注58，「その名称が今日では…」が付せられた本文は，上記の原因中の第3であって，つぎのとおりである。

「(3)何世紀にもわたって引き続き行なわれた諸侯による貨幣変造。これは鋳貨の最初の重量から事実上ただ名称だけをあとに残した。」(S. 114―115. 訳. p. 132.)

この二つの本文と脚注との対応関係を考えるとして，まず現行版での脚注57については，本文――そこで述べられているイギリスで金銀の比価にしたがって磅（ポンド）が$\frac{1}{15}$封度（ポンド）の金の貨幣名称となったというのは，多分1816年に複本位制度を廃棄して金本位制度を確立したさいに金貨と補助貨の銀貨との法定比価を金1，銀14.287とした事実を指すものと思われる。ちなみにフランスでは1803年に複本位制度確立し金銀比価は1：15.5とされている。――と脚注にのべられている事実（その数量的事実について上記のように各版のあいだに異同もある。）との関連は，私の目下の知識をもってしては十分にこれを理解しがたい点があるといわざるをえない。しかしこれにくらべるとつぎの現行版での脚注58と本文との関連対応はよりあきらかであろう。河上博士や長谷部氏のようにロワ訳（やカウツキー版）での脚注の順序が正しいとされることの根拠は，不明である。なおこのロワ訳での「入れ替え」ということも，『資本論』の第2版も，ロワ訳もいずれもはじめ分冊で刊行されたことを考えると，この部分の双方の刊行時期をしらべる必要があるであろう。第2版全9分冊が1872年（7月中旬）から1873年（5月頃）までに刊行され，ロワ訳全44分冊は1872年（8月）から1875年（5月）までに刊行されたという。（『資本論辞典』青木書店，昭和36年）分冊数からみて，この部分の第2版がロワ訳のそれより先行したであろうと想像されるが，私はまだこれを事実として確認していない。

10. D. S. 115. Fußnote 59. 訳. P. 133.

「第2版への注。デイヴィッド・アーカート氏は，その『常用語』のなかで，1ポンド（ポンド・スターリング）というイギリスの貨幣尺度基準の単位が今日では約$\frac{1}{4}$オンスの金に等しいという途方もないこと(！)について述べている。『これは尺度の偽造であって，尺度基準の確定ではない。』(p. 105. 〔このアーカート著からの引用独訳文は，カウツキー版《S. 61》のそれと相違する。第二版では英文。〕)と。このような金重量の『偽称』のうちに，他のどこでもと同じに，かれは文明の偽造する手を見出すのである。」

F. P. 42. I. 上記の note はない。それは項目9に述べたように P. 42. I. note 1 の後半に編入されている。そのかわりにつぎの一文が note 2 としておかれている。これは『経済学批判』(S. 57. 訳. pp. 87―88)の本文からの引用であるが，その指示はない。(Gallimard 版にも Éditions Sociales 版にもその指示はない。)曰く。「相異なる国々では，価格の法定基準は当然相異なる。たとえば，イギリスでは，金属重量としてのオンスは，ペニーウェイト，グレーン，カラット・トロイ〔ここの傍点部分，Gallimard 版，Éditions Sociales 版，イタリック〕に分割されている。しかし貨幣尺度単位としてのオンスは，$3\frac{7}{8}$ソヴリンに，ソヴリンは20シリングに，シリングは12ペンスに分割されており，それゆえ22カラットの金100リーヴル（1200オンス）＝4672ソヴリン10シリング。」

（付注）現行版脚注59に言及されているアーカートの著書からのよりくわしい引用文は，『経済学批判』中の注（S. 58. 訳. p. 93）および『経済学批判要綱』(S. 747. 訳. p. 833)にみられる。荒木氏前掲書，pp. 191―192参照。

11. D. S. 115. ③. Z. 1―3. 訳. P. 133.

「こうして諸価格，または諸商品の価値が観念的に転化されている金量は，いまでは金の尺度基準の貨幣名または法律上有効な計算名で表現される。」〔この文節は初版にない。荒木氏前掲書，p. 171.〕

F. P. 42. I. ③. L. 1—4.

「諸価格，または諸商品が観念的に転化されている金量は，いまでは金の尺度基準の貨幣名によって表現されている。」〔傍点部分は，ロワ訳，Éditions Sociales 版ともにイタリック。〕

12. D. S. 116. Fußnote 61. 訳. P. 134.

「第2版への注。『諸価格の尺度基準としての金〔この「金」について現行版編注に「第2版から第4版まで，貨幣」とある。〕は，商品価格と同じ計算名で現われ，したがって，たとえば1オンスの金は，1トンの鉄の価値〔この引用文は後記のように『経済学批判』からの引用文である。『経済学批判』本文における異同をカッコ内にしるす。「鉄の価値」ではなく「鉄」とある。〕と同じく3ポンド17シリング$10\frac{1}{2}$ペンスで表わされるので，このような金の計算名は，金の鋳造価格〔傍点部分イタリック〕とよばれてきた。したがってあたかも金（または銀）〔（ ）内なし〕はそれ自身の材料で評価され，すべての〔ここに「他の」がはいる。〕諸商品と異なって国家によってある固定した〔傍点部分イタリック〕価格をうけとるかのような，奇妙な考えかたが生じた。一定の金重量の〔„bestimmter Goldgewichte" が „für bestimmte Goldgewichte"〕計算名の固定が，この重量の価値の固定と見誤られたのである。』(Karl Marx, l. c. p. 52.)〔『経済学批判』S. 58. 訳. p. 91.〕」

F. P. 42. I, II. note 4.

「金は諸価格の尺度基準として諸商品の価格と同一の名称を帯び，その上，これらの名称が指示する尺度単位，たとえばオンスの可除部分に応じて鋳造されており，したがって1オンスの金は1トンの鉄の価格と全く同様に3ポンド17シリング$10\frac{1}{2}$ペンスによって表現されうるので，これらの表現は貨幣価格という名称を授与された。金が他のなんらかの商品との比較なしにそれ自体で評価されうるという，またすべての他の諸商品と異なって金が国家から固定価格をうけとるという奇妙な考えを生ぜしめたのは，これである。確定された金の重量についての計算貨幣の名称の固定とこの重量の価値の固定とが混同されたのである。〔ここに『経済学批判』からの引用ページの指示がない。Gallimard 版 (p. 639), Éditions Sociales 版 (p. 110) にはそれがある。〕イギリスの文献はこの思い違いが無限にくだくだのべられている沢山の著作をもっている。それらは海峡の向う側の幾人かの著者たちに同一の馬鹿げた考えをうえつけた。」

（付注）「イギリスの文献は…」以下は，現行版脚注55と内容上ほぼ照応する。前出の項目5をみよ。

13. D. S. 117. ①. Z. 8—9. 訳. P. 135.

「だから，商品の価値量は，社会的労働時間にたいする，ある必然的な，その商品の形成過程に内在的な関係をあらわしているのである。」

F. P. 42. II. ②. L. 30—P. 43. I. ①. L. 1.

「だから，価値量は，生産関係 (rapport de production)，なんらかの一財とそれを生産するのに必要な社会的労働部分との間に存する内在的関係を表わしている。」

14. D. S. 117. ①. Z. 16—19. 訳. P. 136.

「このことは，けっしてこの形態〔価格形態〕の欠陥ではなく，むしろ逆に，この形態を，そこでは規律がただ無規律性の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫徹しうる一生産様式にとって，適当な形態たらしめるのである。」

F. P. 43. ①. L. 12—17.

「これは，この形態〔価格形態〕の欠陥をなすかわりに，逆にこの形態の美点であるところの不明瞭さである，というのは，この不明瞭さは，一生産体制——そこでは規律が平均して互いに償い合い，互いに無力化し合い，互いに相殺し合う不規律性の盲目的遊戯によってのみ法としての力をもつ。——にこの形態を適応させるからである。」

（付注）Gallimard 版 p. 640 の編注1 (p. 1641) に曰く。「マルクスはここでかれが『資本論』第3巻で展開するであろうテーマを予想している。とくに第10章をみよ。」

15. D. S. 117. ②. Z. 1—4. 訳. P. 136.

「しかし価格形態は，価値量と価格との，すなわち価値量とそれ自身の貨幣表現との，量的不一致の可能性を許すだけではなく，一つの質的矛盾を宿らせることができる。」

F. P. 43. I. ②. L. 1—5.

上文中の「質的矛盾」(„einen qualitativen Widerspruch") が「絶対的矛盾」(《une contradiction absolue》) とある。

（付注）この点について Gallimard 版 (p. 641. 編注1〔p. 1641〕), Édition Sociales 版 (p. 112. 編注 1) でともに指摘されているので，とくにしるす。

16. D. S. 117. ②. Z. 10—13. 訳. P. 136.

「他方，たとえば，そこには人間的労働が対象化されていないので少しも価値のない未開墾地の価格のような想像的価格形態も，ある現実的価値関係，または

それから派生した関連を隠していることがありうる。」〔この部分，初版ではつぎの如くである。「けれども，私たちが本質的な生産諸関係のかわりに，たとえば土地の価格のような——土地はそれになんらの人間的労働も対象化されていないのでなんらの価値ももっていないのだが——想像的価格形態を見出す場合には，より深い分析はつねに想像的形態の背後に或る現実的価値関係またはそれから派生した関連が隠されていることを見出す。」(S. 61—62.)〕

F. P. 43. I. ②. L. 15—20.

「だが，他方，たとえば，なんらの人間的労働がそこに実現されていないのでなんらの価値ももたない未開墾地の価格のような想像的価格形態が間接的ではあるが実在的な価値関係を隠していることがありうる。」

(付注) ちなみに本文中の「想像的価格形態」(„die imaginäre Preisform") の「想像的」ということについて，カウツキー版では，上引の文節のもう一つ前の文節——「ここでは価格表現は，数学上のある種の量のように，想像的なものになる。」——への編注 63a でつぎのように述べられている。「想像的 (imaginär) という言葉は，ここでは数学のある表現を模して用いられているのであって，殆んど言い換えることができない。価格表現はここでは単なる表象に照応するという文章でこの言葉を最も手取り早く言い換えることができるであろう。」(S. 63.)

17. S. 117. ③. 5 行目の„... mit Gold ist." と „Um also praktisch..." との間 (訳. p. 136) にロワ訳では，つぎの一文が改行してはいる。〔初版には現行版の上文なし。〕

F. P. 43. I. ④. L. 1—4.

「価格においては，換言すれば，諸商品の貨幣名称においては，諸商品の金との等価は予想されているが，まだ既成事実でない。」

(付注) Gallimard 版，Éditions Sociales 版とも編注でことわることなく，この一文が改行して挿入されている。

なお第 3 章第 1 節中で段落 (改行) についてロワ訳との間に異同があるのは，この項目の個所のほか，つぎの四個所である。

1. D. S. 110. ①. Z. 8. „... Wertform." (訳. p. 126) で，ロワ訳では改行し別文がはいる。
F. P. 40. I. ②. 前出，項目 2。

2. D. S. 110. ②. Z. 8. „Da..." 以下, S. 111. ①. Z. 2. „... anwendbar." まで (訳. p. 127)，ロワ訳では 1 パラグラーフをなしている。F. P. 40. I. ④.

3. D. S. 111. ②. 改行. (訳. p. 128)。F. P. 40. II. ①. L. 11《Si...》以下改行していない。

4. D. S. 112. Fußnote 53. Z. 6. „——In..." 以下 (訳. pp. 128—129) は，F. P. 40. II. note 1. ② として改行。

(経済学部教授)